Tomo Suzuki: [Japanese speech]

00:00:37.980 --> 00:00:55.080

トモ・スズキ：皆様こんにちは。東京の学会一般出版チーム（society general publishing team）のトモユキ・スズキと申します。本日は、今回が初となるオンライン開催の日本Wileyリサーチセミナー（Japan Wiley Society Research Seminar）の第1部セッションにお越しいただき、どうもありがとうございます。

トモ・スズキ：始めに、注意事項がございます。

トモ・スズキ：このセッションは英語で行われ、日本語の同時音声通訳がつきます。画面の下部にあるメニューの言語選択オプションから、お聴きになりたい視聴言語をお選びいただけます。

Tomo Suzuki: [Japanese speech]

トモ・スズキ：視聴者の方は全員ミュートされていますので、講演者への質問は画面下部のQ&Aメニューでテキスト入力し、お送りください。

トモ・スズキ：システムに問題が発生した場合は、チャット機能でお知らせください。こちらで最大限のサポートをさせていただきます。

トモ・スズキ：このプレゼンテーションは録画され、セッション後に準備ができ次第、録画ビデオのリンクを皆様に共有いたします。

トモ・スズキ：本日の講演者はクリス・グラフ氏です。

トモ・スズキ：クリスは、Wileyのオープンリサーチチームの研究公正ディレクターです。

トモ・スズキ：Wileyにおいて、研究者や大学、その他の研究に関わるステークホルダーと頻繁に連携し、透明性、再現性、研究公正に関わるイニシアチブを主導しています。

トモ・スズキ：第7回「研究公正に関する世界会議（World Conference on Research Integrity）」の企画委員会メンバーを務めました。

トモ・スズキ：また、国際STM出版社協会（STM association）、FAIRsharing.org、英国の再現性ネットワーク（Reproducibility Network）において、ステークホルダーによる諮問委員会および執行委員会、作業部会などに参加しています。

トモ・スズキ：以前は出版倫理委員会（*Committee on Publication Ethics*, COPE）の元共同議長を務めていました。

トモ・スズキ：査読と出版物の公正性は、ますます重要性を増しています。クリスは本日、パンデミックの影響やテクノロジーその他のトレンドと、今後の研究公正についての彼の見解を皆様にお話します。

トモ・スズキ：クリスは透明性、研究公正、出版倫理に関するWileyのリーダーであり、私たちは本日、彼をここに迎えることができて嬉しく思います。

トモ・スズキ：クリスのプレゼンテーション中、もしご質問がありましたら、英語ででも日本語ででもご提出ください。

トモ・スズキ：また、セッションの最後に、質疑応答の時間も十分に用意しています。

トモ・スズキ：では、クリスをお迎えしたいと思います。

00:03:50.430 --> 00:03:51.720

クリス・グラフ：トモさん、ありがとうございます。

クリス・グラフ：また、皆さんもお集まりいただきありがとうございます。今から皆さんと研究公正についてお話ができることを、大変うれしく思います。

クリス・グラフ：では、本日はまず、研究公正とは何なのか、そして編集者、出版社としての私たちの役割について、その将来のあるべき姿を考えてみたいと思います。

クリス・グラフ：編集者や出版社、ジャーナルの観点から見た現在の課題と、研究に携わるすべての人々がいかに研究公正の確保に貢献していけるかについて検討していきます。

00:04:37.530 --> 00:04:38.580

クリス・グラフ：こちらがアジェンダです。

クリス・グラフ：まず、研究公正とは何なのかについて見ていきたいと思います。

クリス・グラフ：次に、私たちが直面する問題点について考えます。

クリス・グラフ：それから、いくつかのケーススタディを行い、最後に、編集者、出版社として、私たちがいかに研究公正の未来を描いていけるかについて考えてみたいと思います。

00:05:03.600 --> 00:05:04.500

クリス・グラフ：では、始めましょう。まず、研究公正とは何なのかについてです。これは2019年の*ネイチャー誌*の論説からの引用です。「研究公正の話を始めると、多くの研究者は不正行為についての話だと考える」。これは、今回ご参加の皆さんにも当てはまりますでしょうか？ここで、投票をして確かめてみましょう。私の同僚がZoomで投票を起動しますと、皆さんは投票ができるようになります。そうしましたら、投票をお願いできますでしょうか。はい、こちらです。

クリス・グラフ：スライドと同じ質問になっています。研究公正についての話と聞いて、どんな内容の話だと考えますか？

クリス・グラフ：皆さんの用意ができましたら、いつでも投票できますが、回答の選択肢を読み上げますね。

クリス・グラフ：回答1は、「詐欺や捏造、剽窃の可能性がある不正行為の調査の話だと思う」。これが、回答1です。回答2は、「研究の質や信頼性を高めるためのシステムについての話だと思う」。

クリス・グラフ：回答3では、上記2つの両方を選ぶことができます。また、全然違う、何か別のことだと思ったら、回答4を選んでください。

クリス・グラフ：では、投票をお願いします。回答が集まったら、投票を締め切ります。そしてこの結果について、少しお話することにしましょう。

クリス・グラフ：さて、私には結果が見えていません。別の画面にあるのかもしれません。

Wileyイベント担当：クリスさん、もう少ししたら結果を表示します。

Wileyイベント担当：まだ回答を収集しているところです。では、投票を締め切ります。結果を共有します。

クリス・グラフ：わかりました。ありがとうございます。

00:07:28.230 --> 00:07:41.100

クリス・グラフ：では、皆さんの前に――担当者さん、ありがとうございました――投票の結果が表示されました。19％の方が不正行為についての話だと考え、15％の方が公正性を高め、研究公正を向上させるシステムについての話だと考え、そして大多数の皆さんが、その両方についての話であるとの選択をしました。

クリス・グラフ：よかったです。なぜなら、私もこの選択肢に投票したからです。では、もう少し詳しくこのことについて見ていきましょう。

00:08:12.330 --> 00:08:22.410

クリス・グラフ：次のスライドは、皆さんお気づきだと思いますが、日本におけるガイダンスの一部です。これは、JST、つまり国立研究開発法人科学技術振興機構（*Japan Science and Technology Agency*、JST）のもので、研究者の責任ある研究活動を示すものです。同機構のウェブサイトで見ることができます。さて、JSTも、そのガイダンスでこれら両方の点を選んでいます。つまり、研究公正に関する話は、不正行為の話でもあり、しかし同時にシステム改善の話でもあるのです。

クリス・グラフ：この行動指針に示されている4つの点をご説明します。最初に、研究活動におけるあらゆる不正行為への厳しい批判が述べられていますが、それに続いて、JSTは研究行為における誠実さを信じ、日本において、テクノロジーを通じてそれを育んでいくことがいかに大切であるかということを説明しています。

クリス・グラフ：そして、JSTは誠実で責任感のある研究活動を支援し、研究倫理の教育を促進し、研究改革を進めると述べられています。

クリス・グラフ：ですから、JSTから示されたバランスがおわかりになるかと思います。もしまだご覧になっていないようでしたら、この冊子をお読みになり、ウェブサイトを参照してみてください。このスライドに、ウェブサイトへのリンクを記載しています。

00:09:43.440 --> 00:09:45.810

クリス・グラフ：これが、日本国内のお話です。

クリス・グラフ：では、日本以外の国際的な状況を見てみましょう。

クリス・グラフ：ここで参照するのに良い例が、研究公正に関する世界会議（*World Conference on Research Integrity*、WCRI）、WCRIでのシンガポール宣言です。

クリス・グラフ：この宣言は、2010年のWCRIの参加者340名により採択されたものです。研究者や助成機関、また大学などの研究機関の代表者や研究出版社など、多様なステークホルダーのグループが参加しました。

クリス・グラフ：そして、ここでもまた、研究の質と信頼性を高めるためのシステムに重点が置かれていることがわかります。

クリス・グラフ：この宣言では、ステークスホルダーが負うべき14の責任が示されています。そのうちの12点は、研究公正を高めるためのポジティブで肯定的なステップです。この宣言において、無責任な研究行為に関するものは2点のみです。ですから、ここでも、不正行為への対応と同時に、システムの改善が強調されていることがわかります。

クリス・グラフ：このように、日本国内でも国際的にも、研究公正を高めるシステムやアプローチに対する多大な努力がなされているわけです。

00:11:40.770 --> 00:11:43.530

クリス・グラフ：しかしもちろん、問題点もあります。

クリス・グラフ：これは、出版規範委員会（*Committee on Publication Ethics*、COPE）が、われわれ編集者や出版社が直面する事例のデータを整理し、正式に分類化したものです。

クリス・グラフ：ここに分類化されたそれぞれの事柄について考える前に、少しCOPEについてお話します。COPEとは、出版規範委員会のことです。会員制の組織で、倫理的慣行が標準化された出版文化を実現させるべく、編集者、出版社その他の出版倫理に関わる人々を支援しています。

クリス・グラフ：もし皆さんがWileyの編集者やジャーナルのマネージャーであるなら、もちろん皆さんもCOPEの会員になっています。

クリス・グラフ：Wileyは当社のすべてのジャーナルで会員権を取得しています。

クリス・グラフ：では、分類の方へ戻りましょう。COPEの分類では、問題を17の主カテゴリーに分類しています。

クリス・グラフ：スライドで太字になっているものは、私たちが直面する問題を考えたときに、Wileyにおいて遭遇するもっとも典型的な問題です。

00:13:24.900 --> 00:13:39.480

クリス・グラフ：すなわち、オーサーシップ、文献の訂正、データ関連の問題、問題のある行為、剽窃が、Wileyでよく見られる問題点の大部分です。

クリス・グラフ：そして、これらの問題は、両極の間のどこかに位置づけられます。はっきりと白黒がつけられないのです。

クリス・グラフ：スライドのグラフは、ハーベイ・マルコヴィッチ（Harvey Marcovitch）他の2010年の論文からの引用です。どんな問題にもつきまとう複雑さを表しています。

クリス・グラフ：縦軸は問題の深刻さの度合いが軽いものから重いものを表し、横軸は意図的なものであるかないかを示しています。

クリス・グラフ：ここに番号でリスト化されている問題の種類を考えてみると、21番の問題は「違法な人体実験」ですが、これは明らかに縦軸の深刻度は高く、またほぼ疑いなく意図的な問題です――違法な人体実験を意図せずに行うなんて、ありえませんよね。

クリス・グラフ：ですから、この21番は明らかに、右上の角に来ることになります。ここはそれほどグレーではなく、はっきりと白黒がついています。しかし、その他の問題は、この2つの軸の間のどこかに位置するわけです。9番の、利益相反の非明示を考えてみてください。

クリス・グラフ：これは、状況次第でこの連続する面のどの箇所にもなりえます。

クリス・グラフ：これがマルコヴィッチ氏が論文で指摘している点であり、問題の質には、悪意のない間違いから完全な詐欺までの連続性があるのです。

クリス・グラフ：重要になってくるのが、問題の背後にある意図です。もちろん、これは外部のオブザーバーには知り得ないであろう側面です。もしかしたら、その意図を私たちが理解するのは不可能かもしれません。そしてこのことが、問題の判定を非常に難しいものにしています。

クリス・グラフ：また、Wileyで私たちが遭遇する問題は、どんどん複雑化してきています。

00:16:27.900 --> 00:16:35.550

クリス・グラフ：これはCOPEが公開しているフローチャート、解説画像の1つです。

クリス・グラフ：ここでCOPEが示しているのは、出版プロセスの体系的操作に対するガイダンスです。個人や個人からなる集団が、ジャーナルのプロセスを悪用して何らかの不誠実な行為を繰り返しています。しかもこのような行為は往々にして、複数の論文や、ときには複数のジャーナルを通じて大々的に行われることがあります。

クリス・グラフ：例えば、改訂の際に著者を付け加えることによる、学術論文のオーサーシップ操作や不適切な著者帰属の表示があるかもしれません。

クリス・グラフ：または、偽名や偽の電子メールを使用し、独立した査読に不適切な影響を与える、査読操作があるかもしれません。

クリス・グラフ：もしくは、転写や類似データを悪用する画像操作で、複製されたり剽窃された研究を出版してしまうかもしれません。

クリス・グラフ：そして、これらの多くが、論文代筆業者が関わる場合に複合して起こります。つまりその場合、操作の背後には不誠実な個人だけでなく、組織が存在しているのです。

クリス・グラフ：何が動機となるのでしょうか。「出版か死か」という状況や経済的な動機があり、テクノロジーや編集基準は、ますます複雑化するこれらの問題への対応をサポートする役割を明らかに担っています。

00:18:44.100 --> 00:18:54.150

クリス・グラフ：では、ここでいったんスライドをとめましょう。ここまで、アジェンダの最初の2つの議題について話してきました。研究公正とは何なのか、そして私たちが直面している問題について見てきました。今から、これまでお話したことをより具体的に理解するために、編集者、出版社として私たちが直面する問題についてのケーススタディを見ていきましょう。

クリス・グラフ：始めに、ケーススタディに入る前に確認しておきたいことは、ジャーナルは不正行為の調査や発見はしないという点です。それは大学や規制機関の仕事です。

クリス・グラフ：そうではなく、ジャーナルは自分たちの出版物が正確かつ、期待される法的、倫理的基準を満たすものであることの確保に努める立場であり、これから見るケーススタディはそれを示すものです。

クリス・グラフ：では、最初の事例です。私が冒頭の3行を読み上げます。その後投票を行い、それから内容について少し検討を加えていきましょう。

クリス・グラフ：このケーススタディは、オーサーシップを構成するものは何かに関する事例です。

クリス・グラフ：査読者は原稿を査読することに了承し、それを行います。

クリス・グラフ：原稿を査読し終えた後、彼らはオーサーシップを要求します。なぜなら、彼らは研究内で使用された素材を提供したからだと報告してきます。

クリス・グラフ：ここで質問です。彼らは著者でしょうか？

クリス・グラフ：では、ここで投票をしてみましょう。皆さんへの質問は――ああ、画面が出ましたね、よかった――このスライドの事例では、明らかな解決方法があるでしょうか？

クリス・グラフ：これは明らかな解決方法がある、先ほどお見せした連続面の領域において白黒はっきりした問題なのか、もしくは実際には検討と判断が必要なグレーゾーンの問題でしょうか？ では、どうぞ投票をお願いします。その後、話を進めましょう。

クリス・グラフ：さあ、投票担当さん、投票の状況はどうなっていますか？

クリス・グラフ：まだ集計中？

Wileyイベント担当：はい、回答はまだ集まってきています。もう少しだけ待つことにします。

クリス・グラフ：ありがとうございました。

Wileyイベント担当：では、これで投票を締め切ります。結果を共有しても良いでしょうか？

クリス・グラフ：はい、お願いします。

クリス・グラフ：わかりました。

00:21:56.970 --> 00:21:58.650

クリス・グラフ：ありがとうございます。25％の皆さんが、これは明確な問題で答えは白黒はっきりしているとお考えになりました。75％の方が、これはグレーゾーンの、慎重な検討が必要な問題だと回答しました。私は、これは慎重な検討が必要であるという方に賛成かなと思っています。ここで考えなければならないことは、このようなことです。

00:22:23.490 --> 00:22:26.070

クリス・グラフ：第一に、オーサーシップの基準では、それぞれの著者が研究に対する多大な貢献を行い、責任を担っていることが求められています。

クリス・グラフ：もっともよく引用されるオーサーシップのガイドラインは、ICMJE（*International Committee of Medical Journal Editors*、医学雑誌編集者国際委員会）という組織が作成しました。このガイドラインは、明確な規定を示そうとするもので、かなり広い分野で使用されています。

クリス・グラフ：私たちは、ある個人が、研究材料の提供の条件として、その研究材料が提供され、使用されている場合にはオーサーシップを規定するというMTA（研究材料提供契約）に契約しているケースに遭遇したことがあります。

クリス・グラフ：これは、かなり疑問の余地があります。材料の提供は多大な貢献かもしれませんが、ICMJEのオーサーシップ基準を満たすためには、おそらく、著者、その材料提供者は、ただ材料を提供するだけではなく、それ以上のことをする必要があるかと思います。このケースでは、もしかしたらオーサーシップではなく、謝辞がより適切かもしれません。

クリス・グラフ：そして明らかに、その査読者は、査読を依頼してきた編集者に利益相反を伝えるべきでした。なぜなら、そこには直接の関係性とある種の相反が存在しているからです。

クリス・グラフ：とにかく、このようにオーサーシップが問題となる事例の多くにおいて、ジャーナルはその原稿を保留とし、その問題がその研究が行われた機関によって解決されるまで、掲載することはありません。これは適切な対応だと思います。なぜなら、少なくとも私にはオーサーシップに関する論争の調停を行うのはジャーナルの責任ではないように思えるからです。

それは研究機関や大学がすべき仕事であるように思います。

以上、この事例が皆さんにとって興味深いものであれば幸いです。次のケースに移りましょう。同じ方法で進めたいと思います。私がスライドの上部を読み上げ、皆さんに投票していただきます。

00:24:54.510 --> 00:25:10.200

クリス・グラフ：この事例は、剽窃についてです。ここでも非常に単純化してお話すると、ある読者が掲載された論文に剽窃の可能性があることをジャーナルに指摘し、撤回を要求しています。

クリス・グラフ：皆さんへの質問はこちらです。ジャーナルはどう対応するべきでしょうか？ では、このスライドの投票をお願いします。

クリス・グラフ：今回の事例では、これは明確な解決方法がありますか？ 白黒はっきりした、明確な解決方法があるのか、それともグレーゾーンの問題として検討と判断が必要でしょうか。投票をお願いします。それからまた話を進めましょう。

クリス・グラフ：結果の状況はどうですか？ まだ集計中？それともそろそろ終わりそうですか？

Wileyイベント担当：終わりそうですが、まだ何人かの方から回答を受け取っています。

クリス・グラフ：ありがとうございます。では、完了しましたら共有をお願いします。

クリス・グラフ：いいですね。結果の共有をありがとうございます。そして投票していただいた皆さん、ありがとうございました。今回の事例では、なるほど、前回の時よりもう少し多くの方が、これは白黒はっきりした問題だとお考えになったようです。非常に興味深いですね。では、少しお話していきましょう。

00:26:51.090 --> 00:27:07.590

クリス・グラフ：剽窃の可能性が発生したときには、いくつかのポイントについて考えたいと思います。第一に、論文のどの箇所に文章の類似が起こっているかを考えることが重要です。

クリス・グラフ：また、それが直接的な転記、つまり盗用なのか、もしくは以前の掲載論文をインスピレーションとして使用しているのかの検討も重要です。

クリス・グラフ：さらに、新しい論文の、論文中のデータが真正なものなのか、結果は新規のものなのかどうか。

クリス・グラフ：もしデータが真正で結果が新しければ、可能性としては、修正――必ずではないですが、可能性として――を行い、重複する箇所に関する引用の追加と適切な帰属表示をすることが、以前の出版物の著者の明示と文章引用の適切な方法かもしれません。

クリス・グラフ：ただし、もしそうでない場合、つまり新しいデータがない場合には、実際には撤回が適切な対応となるかもしれません。ですから、この事例は、前回に比べてもう少し白黒はっきりしているようにも思います。

クリス・グラフ：しかし、もう少し検討が必要かもしれないとも思います。実際のところ、私は常に、もう少し検討が必要だと思っているのです。ありがとうございました。2つ目の事例は以上です。では、最後のケーススタディに移りましょう。

00:28:36.420 --> 00:28:57.270

クリス・グラフ：この事例もまたデータの捏造についてで、この質問も前回と同じ方式になります。査読者が論文を受け取り、原稿内のデータ操作に関する疑惑を抱きました。質問はこちらです。編集者と出版社には何ができるでしょうか？

クリス・グラフ：投票をお願いできますでしょうか。ありがとうございます。ここでもやはり、解決策は明らかでしょうか？ 皆さんにとって白黒がはっきりしているか、もしくは判断と対応に移る前に、少し検討が必要でしょうか？ 投票をお願いします。

Wileyイベント担当：回答が集まってきていますので、もう少し待つことにします。

クリス・グラフ：わかりました。投票の運営をとてもうまく進めていただき、ありがとうございます。

クリス・グラフ：準備ができましたら、結果を共有してください。

クリス・グラフ：はい、結果が出ました。

クリス・グラフ：おもしろいことに、前回の投票とほぼ同じ結果になりました。ある程度の数の少数派の方、33％の皆さんが、答えははっきりしていると回答し、より多数の方が、慎重な検討が必要であるとお考えになりました。

クリス・グラフ：私も同感です。私たちWileyには、データ捏造の問い合わせがあれば必ず、より詳細を確認する必要があります。おそらく、そのデータが初めて生成された日時を把握するために、日時の明記されたデータ原本のファイルをリクエストし、著者の所属機関に状況を伝えて調査を依頼する必要も出てくるでしょう。

クリス・グラフ：調査の結果が明確で十分なものであれば、査読を続けることができます。

クリス・グラフ：しかし、もし所属機関からの回答が、実際にデータ捏造だったかもしれないと示唆するものだった場合には、もちろんその論文は却下しなくてはなりません。ですから、ある意味で より検討が必要ではありますが、このケースは、私が説明したような意味で、結果はもう少し明確だったように思います。

クリス・グラフ：これらのケーススタディが、皆さんのお役に立つと良いなと思っています。これらの問題について考えることは、いつもおもしろく、良い参考になる訓練ではありますが、同時に実際の成果に結びつく訓練でなければなりません。往々にして、これらの問題に直面する立場に置かれるのはジャーナルや編集者、出版社だけであり、私たちには問題そのものを解決する責任はないかもしれないものの、それらに対応していく必要があるからです。

00:31:32.970 --> 00:31:42.300

クリス・グラフ：さて、私たちは研究公正とは何かについて、また私たちが直面する問題について見てきました。そして、ケーススタディについて検討しました。では最後に、私たちは編集者、出版社として、いかに研究公正の未来を描いていけるかについて考えてみましょう。

クリス・グラフ：5つの領域、システムについて見ていきます。グローバルな視点で考えること、同時に地域的な視点を持つことについてお話します。また方針とプロセスについて、さらにトレーニングについて簡単に触れます。それからオープンサイエンス、より良いオープンリサーチについてお話します。

00:32:50.760 --> 00:32:58.680

クリス・グラフ：これは、冒頭でお見せしたのと同じ、2019年の*ネイチャー誌*の論説からの引用です。ここで重要なのは、いかなる解決策においても、私たち全員が役割を担っているということです。いかなるステークホルダーも、単体では、研究の質と信頼性を高めるためのシステムを構築することはできません。

クリス・グラフ：ここで注目すべきことは、*ネイチャー誌*の論文の引用を読み上げますが、私たちが見てきたとおり、「研究の不正行為には詐欺、捏造、剽窃が含まれ、これらの不誠実な行為に徹底的かつ公平に対応することは基本であるが、それを行うことで、その損害が発生した後の裂け目を修復することにもなる」ということです。

クリス・グラフ：もちろん、「研究公正には不正調査が含まれるが、それ以上にすべきことが多々ある。研究公正とは、すべての研究の質と妥当性、信頼性を高めるシステムを構築することである」。そして、私たち全員が、そこで貢献できる役割を担っているのです。

00:34:12.690 --> 00:34:25.980

クリス・グラフ：次に、私たちは地域のネットワークを通じていかにベストプラクティスを作り上げていけるかを考える必要があります。これは、グローバルな視点で考えること、国際的な基準を理解し、それを地域的に適用することを意味します。

クリス・グラフ：このスライドの上のバナーは、2022年に南アフリカのケープタウンで行われる予定の、研究公正に関する世界会議のものです。この会議の目的は、研究者、大学のリーダーたち、国内レベルおよび国際レベルの政策立案者、さらに基礎研究や応用研究、自然科学、生物医科学から人文学、社会科学まですべての学際的分野の人々といった研究公正のステークホルダーが一堂に会することです。非常に意義深い合意の機会であり、皆さんにもぜひもっと詳しく知っていただければと思います。より地域的なものとしては、今年韓国のソウル市で開催される、アジア環太平洋研究公正ネットワーク（*Asia and Pacific Rim Research Integrity Network*、APRI）があります。これはアジア環太平洋の国々における研究公正の確立のためのネットワーク強化を目的としています。

クリス・グラフ：また、各国の研究倫理をさらに進めるための情報や取り組みについて意見を交わし、国際基準を満たす、責任ある研究行動規範の策定を行います。ですから、APRIはまさにグローバルに考え、地域的に実践しているわけです。

00:35:57.180 --> 00:36:06.240

クリス・グラフ：では、私たち編集者や出版社は何をすべきでしょうか。私たちはこれに応え、研究公正を高めるための明確な指針とプロセスを確立することができます。私の、また私たちの仲間であるWileyの研究公正チームのエリザベス・モイランは、われわれの研究公正および出版倫理ガイドラインの改訂と拡充の取り組みを主導しています。このガイドラインは、皆さん方すべての編集者とジャーナルが利用でき、皆さんの新たな課題への取り組みをサポートするものです。

クリス・グラフ：私たちの編集上の目標は、著者が可能なかぎり明瞭な情報を発信し、彼らの研究において行われたことに対する完全かつ厳格な責任を担うことで、その読者が彼らの研究を信頼できるようにすることです。そして、これがガイドラインの出発点です。皆さんが、まさにこれを実践するために適用できる基準です。

00:37:07.620 --> 00:37:11.040

クリス・グラフ：3つ目の提案は、協働的なトレーニングを支援し、私たちの編集者や出版社としての知識や専門性をもって知見を届けるということです。このスライドは、協働的トレーニングの一例です。オーストラリアのクイーンズランド工科大学（*Queensland University of Technology*、 QUT）図書館が、QUTの研究倫理公正センターとのコラボレーションにより作成したものです。

クリス・グラフ：これは、今まさに私がお話しているタイプのコラボレーションです。大学の図書館と大学の研究公正チームが協働し、部門と部門の橋渡しをし、両者の専門性を連携させることで、この場合は、研究者がジャーナルの査読や公正さへの影響を理解するための支援を行います。

クリス・グラフ：ちなみに、このスライドの右下には注記があります。この分野におけるWileyの実績を紹介するオンラインサイトへのリンクです。私たちも同じことをしてきました。英国において、私たちは大学図書館と大学の研究公正チーム、そして研究者のネットワークと協働しています。つまり、部門間の障壁を取り除き、私たちの持つ、彼らの役に立つ情報や知識を生かして研究者をサポートし、

クリス・グラフ：協調的なトレーニングを支援すること、これが私たち皆のもう一つの使命です。

00:38:43.830 --> 00:38:52.980

クリス・グラフ：このスライドは開示性の確保についてです。スライドに映っているのは、デンマークのオーフス大学のニールズ・メルガード（Niels Mejilgaard）です。彼は、SOPs4RI（*Standard Operating Procedures for Research Integrity*、研究公正標準作業手順書）と呼ばれる欧州委員会助成プロジェクトの第一次報告書の筆頭筆者の1人です。

クリス・グラフ：このプロジェクトは、研究実施機関や大学、学会、助成機関が研究公正を促進するためのガバナンスや方法を策定する際に利用できる、一連の妥当な作業手順書およびガイダンスを整備するものです。彼らは、ガイダンスを9つのトピックに分類しています。一番下の赤丸で囲った部分が、研究公正を高めるための重要な方法としての開示性と明瞭さ、そしてパブリック・エンゲージメントについての話です。

00:39:55.380 --> 00:39:58.770

クリス・グラフ：ここが、これからお話するオープンリサーチについてのエリアになります。

クリス・グラフ：出版活動における開示性と明瞭さを確保するということは、特に、少なくとも私にとって、そして私が思うに編集者やジャーナルにとって、オープンリサーチを意味します。

クリス・グラフ：オープンリサーチは、理論上もちろん研究内容へのアクセス性を高めますが、それと同時に、研究成果の再現性と公正さも向上させます。では、Wileyが研究者の自由な選択を支援する3つのエリア、つまりオープンアクセス、プレプリント、そしてオープンデータについて少し考えて、このセッションを締めくくりましょう。

00:40:40.590 --> 00:40:47.610

クリス・グラフ：まずはプレプリントです。こちらはベルリン在住の生物学研究者、エラージャ・ローウェンスタイン（Elijah Lowenstein）です。彼は*サイエンティフィック・アメリカン誌*の記事で、プレプリントがとても好きだと述べており、私もある意味それには同意します。彼はまた、この*サイエンティフィック・アメリカン誌*の記事でこうも述べています。プレプリントは、ジャーナルに掲載されるかもしれない記事の単なる1バージョン、1つのドラフト版であり、エラージャ・ローウェンスタインにとってプレプリントは本当に素晴らしいものである。なぜなら、時間を節約でき、オンラインで新たな発見について議論ができ、また研究者同士で、決して発表されることがないであろう否定的な結果を共有することができ、そしてオープンリサーチの文化を育んでいけるからです。そして、これはエラージャだけの話ではありません。

クリス・グラフ：今では他の大勢の研究者が、かつては見ることがなかった多くのプレプリントを受け入れています。

クリス・グラフ：プレプリントは、物理学などの一部の領域では1990年代から利用されていましたが、その他の学会ではあまり活用は進んでいませんでした。2013年以来、生物学者がbioRxivでプレプリントを使用し始めましたが、*サイエンス誌*から抜粋したこの表に、現在のプレプリントの爆発的増加に至るまでの時間経過が示されています。

クリス・グラフ：実際、プレプリントの数は、ジャーナルの投稿論文数の増加の何倍もの早さで増えています。ただし、数字自体はずっと少ないのですが。ですから、プレプリントは数としてはジャーナルの論文よりずっと少なく、おそらく生物医学文献の3％程度ですが、本当に重要なのはその増加率です。これはまったく驚異的であり、特にこの12カ月でプレプリンティングの状況は大きく変わりました。

クリス・グラフ：去年のある時期には、每日100件以上のコロナウイルス研究に関するプレプリントが、連日投稿されていました。

クリス・グラフ：これは、研究者が自分たちの利用する新たなオープンプラクティスが便利だと思えば、研究と研究出版がいかに急速に変化し、進化していくのかについて、私たちに重要な示唆を与えるものです。

クリス・グラフ：これがプレプリント、オープンプラクティスの1つです。

00:43:09.720 --> 00:43:20.160

クリス・グラフ：では、オープンデータについてごく簡単に触れましょう。こちらはジャン＝クロード・ベーグルマン（Jean-Claude Bergelman）、欧州委員会でオープンサイエンスおよびデータポリシーを主導していた人物です。

クリス・グラフ：彼は国連のある会議において、近いうちにすべての科学はデータサイエンスとなるだろうと述べました。

クリス・グラフ：私は、このコメントは比較的穏当なものだと思います。私たちは、より技術的でデータの豊富なデータ収集と結果の発信方法へと移行しつつあるからです。ベーグルマンの意見は適切であると思いますし、彼が所属していた欧州委員会などの助成機関やその他の世界中の組織は、研究者がデータを共有することや、少なくとも共有する姿勢を持つことをより強く要求するようになってきています。ですから、Wileyをはじめとするあらゆるジャーナルが、研究者に対し、論文へのデータ利用可能性ステートメントの記載を依頼するようになっています。このスライドのような内容で、研究者は彼らの特定の研究内のデータ、例えば鳥の繁殖に関する調査のデータが、特定のリンクで参照できることを説明する簡潔な情報を付記します。

クリス・グラフ：Wileyのジャーナルの大半は、研究者のデータ共有を要求したり義務づけたりはしていませんが、代わりに、データ利用可能性ステートメントでデータを共有しているどうかの説明を行うことを研究者に義務づけています。

クリス・グラフ：これが、オープンデータです。では、簡単にオープンアクセスを見てみましょう。

クリス・グラフ：スライドが固まってしまったようですね。どうすればいいのかな？

00:45:13.710 --> 00:45:24.900

クリス・グラフ：とりあえず、スライドが復活するまでそれなしで進めましょうか。オープンアクセスに関する議論において、自由に利用できる論文がより多くの引用数を得ている――実際に18％多く引用されていることを示す証拠があります。これは、オープンリサーチの慣行の詳細を研究しているヘザー・ピウォワー（Heather Piwowar）という研究者により示されています。これはWileyの、私たち自身のデータからも事実であることが示されています。
Wileyでは、オープンアクセスの論文は、ダウンロード数が3倍、引用数は2倍、そしてオルトメトリック指標は5倍となっています。

Wileyイベント担当：すみません、こちらからスライドを共有しましょうか？ 同じスライドがありますので。

クリス・グラフ：それは助かります。では可能でしたら、最後のスライドを表示してもらえますか？とても助かります、ありがとう。

クリス・グラフ：もうすぐ質疑応答の時間なので。

クリス・グラフ：Wileyの論文に関しては、もしそれがオープンであれば、研究者にとってより有益となるというのは事実です。

クリス・グラフ：ここで、先ほどお見せしたニールズ・メルガードと研究公正プロジェクトのSOPのスライドに戻りますが、ここで開示性が強調されているように、パブリック・エンゲージメントにおいて研究成果の開示性と明瞭さを確保することは、研究公正において非常に重要なことです。さて、ここまで私たちは、研究公正とは何なのか、私たちが直面する問題、それを具体的に示す何件かのケーススタディ、そしていかにジャーナルや編集社、出版社が、5つのエリアを通じて論文の質と研究公正の向上に貢献できるか、さらにそこから繋がるオープンリサーチの慣行とそれを可能にするものについて見てきました。最後にお伝えしたいことは、より新しい慣行、つまりプレプリントやデータ共有、オープンアクセスといったより新しい研究慣行は、これまで以上に大きな開示性と明瞭さ、そして公正さを、私たち編集者やジャーナル、出版社にとって、それと同時に著者にとっても実現しやすい形で促しているということです。

00:48:28.950 --> 00:48:36.750

クリス・グラフ：ありがとうございました、以上になります。最後のスライドを表示することはできますか？ここに聞きに来ていただいた皆さんに感謝をお伝えしたいと思います。皆さんにとって有意義な内容であったことを願います。そして私のよき同僚である、先ほどスライド内で皆さんにご紹介したエリザベス・モイランにも感謝します。彼女がこのスライド資料の最初のバージョンを作成してくれました。そして、困難な問題に直面することもある私たちをサポートしてくれる、Wileyの公正出版グループ（Integrity Publishing Group）のメンバーの皆さんにも感謝の意を表します。公正出版グループの皆さんにも、感謝しています。

クリス・グラフ：これで私のプレゼンテーションは終わりです。ありがとうございます。トモさん、お戻しします。

トモ・スズキ：はい、素晴らしいお話をどうもありがとうございました。では、今から質疑応答のセッションに移ります。すでにいくつかの質問がQ＆Aボックスに届いていますので、さっそく最初の質問から始めましょう。

トモ・スズキ：ジャーナルは、査読者の行為について責任を負っていると思います。ジャーナルが、査読者を選定し、査読する原稿を準備します。そこで質問なのですが、なぜ、プロ意識に欠けた行いをする査読者からの掲載要求に対応することが、ジャーナルの責任ではないのでしょうか？

クリス・グラフ：はい、良いご質問ですね。これに関連するのは、2番目のケーススタディでしたでしょうか？ とにかく、査読者が――最初のケースだったかもしれません――、査読者が論文を査読し、「この実験の研究材料を提供したので、オーサーシップを要求する」と言ってきたケースです。これはプロ意識に欠けた行為かもしれません。つまり、質問者の方は正しいと思います。これはプロ意識に欠ける行為かもしれません。ただ、一方ではこれはオーサーシップの正当な主張かもしれず、論文の著者たちはこの査読者を著者として加えるべきだったのかもしれません。私がお伝えしたいのは、このケーススタディのポイントは、結論を出す前に慎重な検討が必要であるということでした。もし、査読者がプロ意識に欠ける行為を行った場合には、ジャーナルは対応する責任があるという点で、私はこのご質問に完全に同意します。

クリス・グラフ：そうですよね？ もし査読者がプロ意識に欠ける振る舞いをしたらです。ただ、もちろん、この査読者がプロ意識に欠ける行いをしたという理解には、慎重な検討が必要です。

クリス・グラフ：ですから、このケーススタディのポイントは、というより実際にはすべてのケーススタディのポイントなのですが、結論を下す前に慎重な検討が必要であるということの強調でした。以上です。いい質問でしたね。トモさん、共有していただきありがとうございました。

00:51:51.330 --> 00:52:13.980

トモ・スズキ：クリスさん、お答えいただきありがとうございました。2つ目の質問はオーサーシップに関してです。もし多大な貢献がオーサーシップの条件であるなら、非常に多くの科学ジャーナルで、なぜ15人やそれ以上の著者が論文に記載されるのですか？ これはこれ自体が問題なのでしょうか？

クリス・グラフ：これはとてもおもしろい質問ですね、ご質問ありがとうございます。この質問は、多くの著者が羅列されたリストについてです。

クリス・グラフ：これは答えも興味深いものです。私がお話したICMJE（*International Committee of Medical Journal Editors*、医学雑誌編集者国際委員会）のオーサーシップ基準は、それぞれの著者の多大な貢献を、その他複数の要素と併せて義務付けています。

クリス・グラフ：これは医学研究学会においては非常によく機能していますが、研究実験が大規模で、非常に大型の装置、例えば大型ハドロン衝突型加速器などを使用する場合、そして往々にして物理学や素粒子物理学、高エネルギー物理学などの分野では、研究論文に掲載される人々の数は、医学研究での標準的な数よりずっと多くなります。そして、私はこれは問題ないと思います。私が思うに、ICMJEの基準は典型的な医学研究に合わせて策定されたものであり、他に多くの貢献者がいる他の学会では、論文執筆には参加していなくとも、彼らは何かしらの重要な貢献をしているのだと思います。

クリス・グラフ：私の見解としては、その学会が、誠実な、しかしICMJEのアプローチとは異なるオーサーシップの慣行を採用することは、まったく問題ないと考えます。

クリス・グラフ：ただ、論文の著者やオーサーシップの数が増えている傾向は確かにあり、興味深い点です。

クリス・グラフ：これは高エネルギー粒子物理学では200人の著者があり得るという話ではなく、生命科学や生物医学の分野において、3、4人だったのが7、8人になるかもしれないという話です。ここでも、それらの著者が何らかの貢献を行っているのであれば、私は問題ないと思います。彼らの貢献の価値に基づいて厳格な判断を下そうとは思わないでしょう。私が懸念するのは、ささやかながら重要な貢献をした誰かよりも、何も貢献していないのにオーサーシップの欄に掲載される人たちだろうと思います。例えば、私たちが現在、ある化学ジャーナルで対応を迫られている複雑な問題の1つに、このようなものがあります。論文を投稿してきたある著者、または著者グループがいて、最初の改訂で彼らは著者を1人追加し、1人を削除します。

クリス・グラフ：2回目の改訂で、彼らはまた別の著者を追加し、他の1人を削除します。そして、時には校正の段階で、彼らはまたオーサーシップに変更を加えてきます。

クリス・グラフ：こういったことは許容される行為ではありません。オーサーシップを変え続けることは明らかに、最初の段階の著者表記が間違っていたか、貢献を行った人々の記載が不正確だったか、どこかの時点から、著者が貢献を行った人々の代表ではなくなったように思えます。ですから、私は、単純に全員が何らかの貢献をした場合の著者の長いリストよりも、このような行為に懸念を抱いています。この答えがお役に立つといいのですが。ありがとうございました。

00:56:30.930 --> 00:56:34.650

トモ・スズキ：ありがとうございました。いくつか他の質問が届いています。

トモ・スズキ：では、次の質問も査読に関してです。データ捏造の疑いで調査を受け、捏造が見つからずに調査が完了した場合、編集者は新たな査読者を任命するべきか、それとも捏造を疑った元の査読者がもし続けたいのであれば、引き続きお願いするのが公平でしょうか？

クリス・グラフ：はい、良い質問ですね。

クリス・グラフ：ご質問は、想定として、論文が提出され、大学で調査を受けた後、もしその調査で何も問題が見つからなかった場合にどうすべきかということですね。

クリス・グラフ：まず言えることは、調査は長期間にわたることが多く、論文投稿から大学の調査、そして調査の結果が出るまでにはおそらく数カ月かかります。ですから、現実的な話として、新しい査読者を探す必要があるかもしれません。

クリス・グラフ：ただ、私は、必ずしも新しい査読者を選ばなければならない倫理的な理由があるとは思いません。もしかしたら以前の査読者は有益な洞察があったかもしれず、または今はもう時間がないなど、引き受けられない実際的な理由ができたかもしれません。ですから、新しい査読者を探すことはもちろん絶対的な要件ではありません。もちろん、以前の査読者が、現在何らかの対立（利益相反）を抱えていなければの話です。ですから、これは状況によるかと思います。もし査読者が現在、調査によって著者との何らかの対立――対立ではなく、利益相反ですね――を抱えていれば、新しい査読者を探すのが理にかなっていると思います。テクニカルな、良い質問ですね。仮定的な質問です。

クリス・グラフ：このような仮定の話を論じるのはいつでも少し難しいのです。なぜなら、どのケースでも、全てのケース特有の要素が重要であり、助言が変わってくるからです。ですから繰り返しになりますが、先ほどの3つのケーススタディが提示していたのは、誰にとっても、まったくの白黒はっきりというのはありえないということです。すべてのことが詳細に検討される必要があります。

クリス・グラフ：それが、このご質問に対する私の答えです。お役に立てていたら嬉しいです。トモさん、ありがとうございます。

00:59:24.240 --> 00:59:27.420

トモ・スズキ：ありがとうございました。他にも質問が来ていますが、時間がなくなってきましたので、最後に1つ、簡単な質問を。

トモ・スズキ：オープンデータが科学のために重要であることには同意しています。しかし、もしバイアスのかかったデータが公表されていた場合には、私たちはどうすべきですか？ 取り下げなどの方策を取ることは可能でしょうか？

クリス・グラフ：ご質問は、質の低い公表データについてですね。私は、私たちが担う責任は、私たちが出版する論文の質と、それらに含まれる素材が真正なものであることを保証することだと思います。

クリス・グラフ：いいですか？ もしジャーナルに掲載された論文内のデータに関する報告があり、そのデータの質が悪かったり問題があると判明した場合には、私たちはその論文を、著しく信頼性の低いデータとして撤回したり取り下げを行うことになります。

クリス・グラフ：それは私たちの責任です。

クリス・グラフ：そのデータは、学術機関リポジトリや、その他のデータを保管するリポジトリに共有されているかもしれません。確かにそのデータが同様に取り下げられることは私たちの関心事項ではありますが、それを行うのは彼らの責任であり、私たちの責任ではありません。ですから、私たちは、明確に自分たちの責任範囲であることにしっかり集中するべきだと私は考えます。

クリス・グラフ：これが私からの回答です。トモさん、ありがとうございます。

01:01:11.310 --> 01:01:21.960

トモ・スズキ：クリスさん、ありがとうございました。残念ではありますが、これで質疑応答のセッションは終わりになります。改めましてクリスさん、この重要なテーマについてのプレゼンテーションをどうもありがとうございました。

トモ・スズキ：そして、私たちは来週3月16日にも、引き続きセミナーを開催することを楽しみにしております。2人目の講演者、スティーブン・オットガーリ氏が、出版業務においていかにテクノロジーとイノベーションが学術出版の現在を形づくっているかについてお話ししてくださります。

トモ・スズキ：また、ご連絡事項がございます。このセッションの録画と来週のプレゼンテーションは、来週のセミナーが終了した後に共有いたします。このセッション内でお答えできなかった質問についても補足する予定です。

トモ・スズキ：それでは皆様、本日はこのセミナーにご参加いただき、またご質問を寄せていただきありがとうございました。また来週お会いできることを楽しみにしております。ありがとうございます。